

# ウダーナヴァルガのギルギット写本

松田和信

〔抄録〕

矢田修眞師およびスリナガルの Sir Pratap Singh Museum 所蔵のギルギット写本コレクションから、ギルギット・バーミヤン第2型文字で書写された、一葉の表裏を構成する樺皮写本断簡を取り上げ、それを梵文『ウダーナヴァルガ』第26章「涅槃の章」に同定した上で、さらにその断簡が、二つのヴァージョンで存在したことが推定されている『ウダーナヴァルガ』のテキスト伝承において、従来写本のほとんど知られていなかった Recension 2 に相当する写本断簡であることを示した。

**キーワード** ウダーナヴァルガ、ウダーナ、法句経、ギルギット写本、涅槃

## まえがき

本年(2010年)6月下旬、浄土宗高德寺(東京都港区北青山)の住職矢田修眞師より連絡があり、1986年に同師がラダックのレーとカシュミールのスリナガルで入手した樺皮写本の断簡22点の写真提供を受けた。大部分はレーで購入されたものではあるが、元の所有者はギルギット在住の貿易業者であったとのことであり、書写に用いられた文字や写本のフォーマット等から判断しても、いわゆる「ギルギット写本」の範疇に入るものと考えて差し支えない<sup>(1)</sup>。さらに同時に、スリナガルの Sir Pratap Singh Museum において、同師自身によって同じ1986年に撮影された同類のギルギット写本の写真約200点の提供も受けた。写真には、ギルギット・バーミヤン第1型文字(6-7世紀)で書写されたほぼ完全な大乘經典の貝葉写本の束が1点、さらに多数の樺皮写本の断簡が撮影されている。重複して撮影されている断簡も多いので、何点の断簡が撮影されているのか一概には言えないが、少なくとも200点以上の雑多なギルギット写本の断簡が含まれているように見える。ただ大きなサイズの断簡は少なく、大部分はギルギット・バーミヤン第2型文字(8世紀以降)で書写された樺皮写本の小さな断片である。

スリナガルの Sir Pratap Singh Museum が所蔵するギルギット写本については、フライブ

ルク大学のオスカー・フォン・ヒニューバー教授によって出版されたギルギット写本の書誌情報の中に、『法華経』1点、*Samghāṭa-sūtra* 3点、さらに *Āryadharmā* という暫定的なタイトルがつけられた經典の、計3種の大乗經典写本が紹介されている<sup>(2)</sup>。矢田修眞師によって撮影された写本のうち、大乗經典の貝葉写本1点はヒニューバー教授によって *Āryadharmā* のタイトルで紹介されているものであるが<sup>(3)</sup>、他の雑多な断簡類は、この時点ではヒニューバー教授によっては同書の序文の中で多少触れられているだけである。なお同ミュージアムの写本類は、1979年に同地を訪れた佛教大学の調査チームによっても撮影されている<sup>(4)</sup>。その時撮影された写真に基づいて、*Samghāṭa-sūtra* に対する研究と、写本のローマ字転写の一部が真田康道教授によって公表されている<sup>(5)</sup>。さらに『法華経』の写本については調査チームの一員であった並川孝儀教授によって研究されたが、ほぼ同時期にフォン・ヒニューバー教授が写本の写真とローマ字転写を出版した<sup>(6)</sup>。筆者は並川教授より、教授が保管していた写真のゼロックスコピーを提供していただいたが、その中には矢田師の写真に含まれる断簡類も多く見られる。ただ本稿で取り上げる断簡は佛教大学の写真には含まれていない。なお残念なことに、佛教大学の調査チームによって撮影された写真のオリジナルとそのネガフィルムが佛教大学のいずれこの部署あるいは研究室に現在保管されているのか明らかでない。また矢田師からは、これらの写本類はその後カシュミール大学に移管されたと伺ったが、現在の保存状況について筆者自身が正確な情報を得ているわけではない。

### 写本断簡のローマ字転写

本稿で取り上げる断簡は、矢田師のコレクション中の一葉、および矢田師から提供された写真に含まれる Sir Pratap Singh Museum の一葉である。これら2点はいずれも樺皮にギルギット・パーミヤン第2型文字で書写され、ほぼ原形をとどめる一葉である。ただしいずれも片面の断簡である。一面は7行よりなる。樺皮写本は数枚の樺皮を貼り合わせて写本用紙とするが、時間が経つと表 (recto) と裏 (verso) は容易に剝離する。書かれている内容と写本の外観から判断して、この2点は、同一フォリオの表と裏である。矢田師所有の一葉には、向かって左側の欄外に「177」の頁番号が記されている。ネパール・チベット系写本と異なり、ギルギットを含む中央アジア系写本は表に頁番号を記するのが普通である。内容から見ても矢田師の一葉が表、ミュージアムの一葉が裏である。写本の内容については、この断簡が梵文『ウダーナヴァルガ (*Udānavarga*)』を書写した写本の一葉であることが判明した。ただ書かれている文章はベルンハルトの校訂本で知らる『ウダーナヴァルガ』のテキストとは明らかに異なる。これについては後で述べる。一葉が片面づつ二つに剝離して泣き別れとなり、表面は市中に出回って矢田師に購入され、裏面はミュージアムの収蔵品となっているのである。以下にまず両面のローマ字転写を提示する。なお誤写と思われる箇所については転写中に注記する。

folio 177, recto (Yada Collection)

1 m āgatigatir bhavati | āgatigatau satyām āyatyām cyutyupapādo bhavaty āyatyām  
cyutyupapāde sati | evam āyatyām jātijarāvyādhimaraṇaśokaparide-

2 vaduḥkhadaurmanasyopāyāsās saṃbhavaṃty evam asya kevalasya mahato duḥkha-  
skandhasya samudayo bhavati || niśrite asati caritaṃ na bhavati carite asa-

3 ti ratir (Ms. natir) na bhavati | ratāv (Ms. natāv) asatyām praśrabdhir bhavati  
praśrabdhau satyām āgatigatir na bhavati | āgatigatāv asatyām āyatyām cyutyupapādo  
na

4 bhavaty āyatyām cyutyupapāde asati | evam āyatyām jātijarāvyādhimaraṇaśokapari-  
devaduḥkhadaurmanasyopā(yā)sā nirudhyaṃte e-

5 vam asya ke[vala]sya mahato duḥkhaskandhasya nirodho bhavati || asti bhikṣavo  
'jātam abhūtam akṛtam asaṃskṛtam asamutpannam\* | asti jātaṃ

6 bhūtaṃ kṛtaṃ saṃ[skṛ]taṃ [patitaṃ pra]tītyasamutpannam\* || no ce[d bhi]kṣavo  
'jātam abhūtam akṛtam (Ms. utpannam) asaṃskṛtam asamutpannaṃ bhaven nāhaṃ  
(jātasya bhūtasya kṛtasya)

7 [saṃ](skṛtasya patita)sya pratītyasamutpannasya nissaraṇam astīti vadeyam\* | yas-  
māt tarhi bhikṣavo 'sty ajātam abhūtam a(kṛtam asaṃskṛtam asamutpannaṃ tasmā-)

verso (Sir Pratap Singh Museum Collection)

1 (j jātasya bhūtasya) [kṛ]tasya saṃskṛtasya patitasya pratītyasamutpannasya  
nissaraṇam astīti vadāmi || jātaṃ bhūtaṃ samutpannaṃ kṛtaṃ [sa](ṃskṛtam adhru-  
vam\* | jarāmara-)

2 ṇasaṃghā[taṃ] moṣadharmā(pra)[lo]panam\* || āhārahētoprabhavaṃ nālaṃ tad abhi-  
nanditum\* | tasya nissaraṇaṃ śāntam atarkāvacaraṃ padam\*(|) nirodho duḥkhadharmā-  
ṇā(ṃ) sa(ṃ-)

3 skāropaśa[maḥ su]kham\* || abhijānāmy ahaṃ bhikṣavas tad āyatanam yatra na  
pṛthivī pratiṣṭhitā nāpo na tejo na vāyur nākāśānāntyāyatanam na vi-

4 jñānānāntyā[ya](tanaṃ) nākiṃ[cany]āyatanam\* na naivasamjñānāsamjñāyatanam  
nāyaṃ loko na paraloko nobhau sūryacandramasau (Ms. sūryā-) apratiṣṭhitam a-

5 nālaṃbanam eva tat\* || tatrāhaṃ bhikṣavo nāgatiṃ vadāmi na gatiṃ na sthitaṃ na  
cyutiṃ nopapattiṃ eṣa evānto duḥkhasya || pṛthivī yatra āpaś ca tejo

6 vāyu[r na] gāhate | [na ta]tra [śukl]ā dyotante tamas tatra na vidyate | na ta[tra  
candra]mā bhāti na cādityaḥ prakāśate | yatas tam ā[tman]ā veda mauneyaṃ  
brāhmaṇo [mu-]

7 [ni]ḥ | atha rūpād arūpāc ca sarvaduḥkhāt pramucyate | niṣṭhāgato hy asaṃtrāsi avikanthī akaukrīti | ācchettā bhavaśalyānām antimo 'sya samucchrayaḥ |

## テキストと和訳

この断簡一葉に含まれる梵文『ウダーナヴァルガ』の文章は、ベルンハルトによる校訂本で言えば、第26章「涅槃の章 (Nirvāṇavarga)」の第20偈より第28偈に対応する。ただしこの断簡では、第20偈、21偈、24偈、25偈に相当するウダーナは韻文ではなく、散文で現れる。数としては、この一葉には6項目のウダーナの句が含まれる。仮にそれらを udāna-A から udāna-F に分け、対応するベルンハルト本『ウダーナヴァルガ』の偈番号、さらにパーリ語の三蔵に含まれる『ウダーナ』『イティブツタカ』『法句経』に対応箇所がある場合は、それが韻文 (verse) であるか散文 (prose) であるかを示してテキストを再構成し、和訳と必要最小限の注解を加える。テキストの再構成にあたっては、句読点を内容から判断して取捨した。さらにサンディ規則等も読解に影響を与えない範囲である程度は正規形に改めたが、写本の語形をそのまま残した部分も多い。転写中に用いた括弧のうち、鉤括弧（部分的に欠損した文字の推定）および一音節あるいは一文字のみに用いた丸括弧（写本の破損等によって失われた文字の想定）は削除した。

### udāna-A (prose) Udānavarga 26.20, Pāli Udāna VIII.4 (prose)

(niśrite sati calitaṃ bhavati | calite sati ratir bhavati | ratau satyāṃ na praśrabdhir bhavati | praśrabdhāv asatyā)(r1)m āgatigatir bhavati | āgatigatau satyāṃ āyatyāṃ cyutyupapādo bhavati | āyatyāṃ cyutyupapāde saty evam āyatyāṃ jātijarāvvyādhimaraṇaśokaparide(r2)vaduḥkhadaurmanasyopāyāsās saṃbhavanti | evam asya kevalasya mahato duḥkhaskandhasya samudayo bhavati || niśrite asati calitaṃ na bhavati | calite asa(r3)ti ratir na bhavati | ratāv asatyāṃ praśrabdhir bhavati | praśrabdhau satyāṃ āgatigatir na bhavati | āgatigatāv asatyāṃ āyatyāṃ cyutyupapādo na (r4) bhavaty āyatyāṃ cyutyupapāde asati | evam āyatyāṃ jātijarāvvyādhimaraṇaśokaparidevaduḥkhadaurmanasyopāyāsā nirudhyante e(r5)vam asya kevalasya mahato duḥkhaskandhasya nirodho bhavati ||

（依存するものがあれば、動揺がある。動揺があれば、愛著がある。愛著があれば、安らぎがない。安らぎがなければ、）来ること (āgati) や行くこと (gati) がある。来ることや行くことがあれば、将来 (āyati)、死ぬこと (cyuti) や生まれること (upapāda) がある。将来、死ぬことや生まれることがあれば、すなわち将来、生、老、病、死、憂い、悲しみ、苦しみ、悩み、不安が生じる。このようにして、あらゆる苦しみの大きな集まりが生じるのである。依

存するもの (niśrita) がなければ、動揺 (calita) はない。動揺がなければ、愛著 (rati) はない。愛著がなければ、安らぎ (praśrabdhi 軽安) がある。安らぎがあれば、来ることや行くことがない。来ることや行くことがなければ、将来、死ぬことや生まれることがない。将来、死ぬことや生まれることがなければ、すなわち将来、生、老、病、死、憂い、悲しみ、苦しみ、悩み、不安が消滅する。このようにして、あらゆる苦しみの大きな集まりが消滅する。

**注解** 断簡から回収される最初のウダーナである。前のフォリオから続く文章を想定して補った。後半は前半の逆を言ったものであるから想定は容易である。対応するパーリ語の『ウダーナ』と同様、このウダーナは散文で綴られる。ただしパーリ語ヴァージョンの方が文章は簡素である<sup>(7)</sup>。チベット語訳も散文であり、梵文と完全に一致する<sup>(8)</sup>。現行ベルンハルト本の第26章20偈<sup>(9)</sup>はこの散文ウダーナを韻文に作り替えたものであり、その逆は考えられない。つまり、散文の方が古形を伝えているのである。古バージョンを伝えるスバシ写本でも、この部分は断片的に残存しているが、韻文ではなく散文で現れる<sup>(10)</sup>。なお文中の「動揺 (calita-)」は、想定部分も含めて4度現れるが、写本に現れる二箇所は、どちらも carita- と書写されている。パーリ語ヴァージョン、ベルンハルト本、スバシ写本のいずれも calita- とする。ただしチベット語訳 (spyod pa) から推定される原語は carita- である<sup>(11)</sup>。これは誤写ではなく、この系統の写本では carita- と伝承されていたと思われる。ただ、梵文テキストとしては他の資料にあるような calita- が正しいと思われる。ここでは写本を訂正した。

**udāna-B (prose) Udānavarga 26.21, Pāli Udāna VIII.3 (prose)**

asti bhikṣavo 'jātam abhūtam akṛtam asaṃskṛtam asamutpannam | asti jātaṃ (r6)  
bhūtaṃ kṛtaṃ saṃskṛtaṃ patitaṃ pratīyasamutpannam || no ced bhikṣavo 'jātam abhū-  
tam akṛtam asaṃskṛtam asamutpannaṃ bhaven nāhaṃ (jātasya bhūtasya kṛtasya) (r7)  
saṃ(skṛtasya patita)sya pratīyasamutpannasya niḥsaraṇam astīti vadeyam | yasmāt  
tarhi bhikṣavo 'sty ajātam abhūtam a(kṛtam asaṃskṛtam asamutpannaṃ tasmā(v1)j  
jātasya bhūtasya) kṛtasya saṃskṛtasya patitasya pratīyasamutpannasya niḥsaraṇam  
astīti vadāmi ||

比丘たちよ、生じた (jāta) のではないもの、現れた (bhūta) のではないもの、作られた (kṛta) のではないもの、形成された (saṃskṛta) のではないもの、生起した (samutpanna) のではないものがある。〔さらに一方〕生じたもの、現れたもの、作られたもの、形成されたもの、起こったもの、縁起したものがある。比丘たちよ、もし生じたのではないもの、現れたのではないもの、作られたのではないもの、形成されたのではないもの、生起したのではないものがないならば、『生じたもの、現れたもの、作られたもの、形成されたもの、起こったもの (patita)、縁起したもの (pratīyasamutpanna) を離れること (niḥsaraṇa 出離) が

ある』と私は説かないであろう。ところが比丘たちよ、生じたのではないもの、現れたのではないもの、作られたのではないもの、形成されたのではないもの、生起したのではないものがあるから、だから『生じたもの、現れたもの、作られたもの、形成されたもの、起こったもの、縁起したものを離れることがある』と私は説く。

**注解** このウダーナも散文で綴られている。チベット語訳も同じ<sup>(12)</sup>。パーリ語ヴァージョンも同様である<sup>(13)</sup>。スバシ写本も、この部分は断片的にしか回収されていないが、散文である<sup>(14)</sup>。ハンブルク大学のシュミットハウゼン教授によって、このウダーナと同文の経文が『瑜伽師地論』の本地分「無余依地」に引用されることが指摘され、未出版の『瑜伽論』写本からテキストが回収されたが<sup>(15)</sup>、その後、同教授によって本地分の有余依・無余依地全体の校訂テキストが出版されている<sup>(16)</sup>。ベルンハルト本では、Aと同様、韻文に改作されて現れる<sup>(17)</sup>。このウダーナBも古いバージョンを伝えているのである。なお文中の「起こったもの (patita)」の語は、この断簡とチベット語訳のみに現れ、他の資料には見られない<sup>(18)</sup>。

#### udāna-C (verse) Udānavarga 26.22-23, Pāli Itivuttaka 43 (verse)

jātaṃ bhūtaṃ samutpannaṃ kṛtaṃ sa(ṃskṛtaṃ adhruvaṃ |

jarāmara)(v2)ṇasaṃghātaṃ moṣadharmā(pra)lopanam |

āhārahetuprabhavaṃ nālaṃ tad abhinanditum || (22)

tasya niḥsaraṇaṃ sāntam atarkāvacaraṃ padam |

nirodho duḥkhadharmāṇāṃ saṃ(v3)skāropaśamaḥ sukham || (23)

生じたもの、現れたもの、生起したもの、作られたもの、常住ではないもの (adhruva)、老いと死が積み重なった (saṃghāta) もの、迷妄 (moṣa) を性質 (dharma) として壊滅するもの (pralopana)、食物 (āhāra) を原因 (hetu) として生じるもの、その〔ようなもの〕は楽しむに適さない。その〔ようなもの〕を離れること (niḥsaraṇa) は、思弁の領域 (tarkāvacara) を離れた寂靜なる境地 (pada) であり、苦しみを性質とするものの滅尽であり、形成作用 (saṃskāra) の寂滅であり、安樂である。

**注解** このウダーナはベルンハルト本と同様に韻文二偈で綴られている<sup>(19)</sup>。チベット語訳も同様に韻文二偈で訳されている<sup>(20)</sup>。パーリ語の『ウダーナ』にはこれら二偈は存在せず、全同ではないが、パーリ語の『イティブッタカ (Itivuttaka)』43において、先のウダーナBと同じ散文に続いて二偈が現れる<sup>(21)</sup>。第22偈の pāda e に見られる āhārahetu- に対応する語は、ベルンハルト本では āhāranetrī- と校訂されている。『イティブッタカ』もベルンハルト本と同じで、この断簡には一致しない。ただ意味としては、āhāranetrī- は理解困難であるが、ここに見られる一連の語は、苦なる人間存在を表現したものであるから、āhārahetu- の方は理

解し易い<sup>(22)</sup>。

これら二つのウダーナの偈がパーリ語の『ウダーナ』の中に存在せず、『イティブツタカ』の方に含まれていることから類推されるのは、説一切有部教団が伝承したと推定され、その後失われた梵文『ウダーナ』には、この二偈がウダーナの句として含まれ、逆に同じ説一切有部教団の伝承した『イティブツタカ』(梵文では *Ityuktaka* あるいは *Itivṛttaka*) には、この二偈が存在しなかったことを物語っているのではないか。説一切有部教団では、これら二偈が『ウダーナ』の方に含まれていたことから、後に『ウダーナヴァルガ』の編纂にあたってその中に組み込まれたのであろう。説一切有部教団ヴァージョン『イティブツタカ』の漢訳と見なされる『本事経』(大正765)では、二偈に対応する偈は見られないようであり、筆者の推定を補強しているように思われる。説一切有部教団の三蔵では、最初から『法句経』と『ウダーナ』が個別には伝承されず、『ウダーナヴァルガ』のみが伝承されたということではないであろう。

**udāna-D (prose) Udānavarga 26.24-25, Pāli Udāna VIII.1 (prose)**

abhiñāmy ahaṃ bhikṣavas tad āyatanaṃ yatra na pṛthivī pratiṣṭhitā nāpo na tejo na vāyur nākāśānāntyāyatanaṃ na vi(v4)jñānānāntyāya(tanaṃ) nākimcanyāyatanaṃ na naivasamjñānānāntyāyatanaṃ nāyaṃ loko na paraloko nobhau sūryacandramasau apratiṣṭhitam a(v5)nālabanam eva tat || tatrāhaṃ bhikṣavo nāgatim vadāmi na gatim na sthitam na cyutim nopapattim eṣa evānto duḥkhasya ||

比丘たちよ、私はその場所 (āyatana) を知っている。そこには支えとなる (pratiṣṭhitā) 地面 (pṛthivī) もなく、水もなく、火もなく、風もなく、空無辺処もなく、識無辺処もなく、無所有処もなく、非想非非想処もなく、この世 (ayaṃ lokaḥ) もなく、あの世 (paraloka) もなく、太陽も月もなく、まさにそこは〔何かに〕支えられているところではなく (apraṭiṣṭhita)、寄りかかられているところでもない (anālabana)。ここで比丘たちよ、私は〔そこに〕来ることも説かず、行くことも、留まることも、死ぬことも、生まれることも〔説か〕ない。それこそが苦しみの終わり (anta) である。

**注解** パーリ語の『ウダーナ』では第8章の最初のウダーナで、パーリ語でも散文で綴られている<sup>(23)</sup>。チベット語訳も散文で、これに完全に一致する<sup>(24)</sup>。ベルンハルト本は同内容を二つの偈に作り替えている<sup>(25)</sup>。このウダーナについても、A、Bと同様、断簡から回収される散文ウダーナの方が古形を伝えていると思われる。

**udāna-E (verse) Udānavarga 26.26-27, Pāli Udāna I.10 (verse)**

pṛthivī yatra āpaś ca tejo (v6) vāyur na gāhate |  
na tatra śuklā dyotante tamasa tatra na vidyate || (26)

na tatra candramā bhāti na cādityaḥ prakāśate |  
 yatas tam ātmanā veda mauneyaṃ brāhmaṇo mu(v7)niḥ |  
 atha rūpād arūpāc ca sarvaduḥkhāt pramucyate || (27)

地面も水も火も風も入ってこないところ、そこでは明るい〔光も〕輝かず、そこには暗闇もない。そこでは月も照らさず、太陽も輝かない。聖者（muni）である婆羅門（brāhmaṇa）は、聖者たること（mauneya）を自ら知り、形あるものから、形なきものから、すべての苦しみから解放される。

**注解** このウダーナはベルンハルト本と同様に韻文二偈で綴られている<sup>(26)</sup>。チベット語訳も同じ韻文で訳されている<sup>(27)</sup>。パーリ語『ウダーナ』1.10でもこれら二偈が連続して韻文で現れる<sup>(28)</sup>。ウダーナCの場合と事情は似ているが、これら二偈は説一切有部教団の『ウダーナ』でも韻文で綴られていたのであろう。ウダーナDと同様、このウダーナの内容は、ニルヴァーナ（涅槃）を何らかの空間的なものに擬して描いたものであることは容易に理解できるが、問題は27偈の pāda c, d である。写本では確かに上記テキストのように読めるが、特に pāda c については、ベルンハルト本は yathā tv ihātmanā vetti と校訂し、パーリ語『ウダーナ』も yadā ca attan' āvedi とあって、この断簡とは一致しない。ただベルンハルトが校訂に用いた写本の中には yataś ca ātmanā ved[a] という、この断簡に似た読みを伝える写本もある<sup>(29)</sup>。ただ、この断簡のみに見られる男性形対格の tam が何を指しているのか理解しがたい。現時点でこれは筆者には解決できない問題であり、ここでは tam は訳していない。この語を含む pāda c, d の内容は難しく、上記の和訳は現時点での暫定的な翻訳であることを述べておきたい。

#### udāna-F (verse) Udānavarga 26.28, Pāli Dhammapada 351

niṣṭhāgato hy asaṃtrāsī avikanthī akaukrṭī |  
 ācchettā bhavaśalyānām antimo 'sya samucchrayaḥ || (28)

究極に到達し（niṣṭhāgata）、恐れるものなく（asaṃtrāsin）、驕慢もなく（avikanthin）、後悔もなく（akaukrṭin）、生存（bhava）の矢を断ち切った人（ācchettṛ）、彼にとっては〔これがもはや輪廻しない〕最後のからだ（samucchraya）である。

**注解** ウダーナFは断簡から回収される最後のウダーナである<sup>(30)</sup>。ベルンハルト本と同様に韻文で綴られている。チベット語訳も同様<sup>(31)</sup>。パーリ語の三蔵では、これに対応する句は『ウダーナ』ではなく、『法句経』に見られる<sup>(32)</sup>。説一切有部教団が伝承した三蔵では、パーリ語の三蔵と異なり、この偈は『法句経』ではなく、『ウダーナ』の方に含まれていたのであろう。

## 二つのヴァージョン

全体で33章より構成される『ウダーナヴァルガ』は、『法句経』と『ウダーナ』が説一切有部教団（あるいは根本説一切有部教団）において編集され、一書とされたものと見なされている<sup>(33)</sup>。さらに東京外国語大学の中谷英明教授が示唆したように、そのうち第26章から33章の末尾8章は専ら『ウダーナ』に由来するようである<sup>(34)</sup>。本稿で紹介した一葉は、第26章「涅槃の章」に対応する断簡であるから、その内容の出自は『ウダーナ』に求めることができると言ってよい。ただこの断簡は、失われた梵文『ウダーナ』の断簡ではなく、梵文『ウダーナヴァルガ』の断簡である。パーリ語の『ウダーナ』のように、ウダーナの句に先立つ因縁物語は見られず、散文、韻文にかかわらず、すべてウダーナの句のみで構成されている。さらにこの一葉の頁番号は177である。この頁番号からも、もし残っていたとしたら、本写本が『ウダーナヴァルガ』全体を書写した写本であったことが容易に推定されよう。しかし本稿で紹介したように、ベルンハルト校訂本の梵文『ウダーナヴァルガ』が全編韻文で綴られているのに対して、この一葉の断簡に含まれるウダーナの句の過半は散文で記されている。これはパーリ語の『ウダーナ』の対応部分と一致する。この断簡の中で散文で現れるウダーナの句は、パーリ語の『ウダーナ』でも散文で綴られているのである。

かつてシュミットハウゼン教授によって明らかにされたように、梵文『ウダーナヴァルガ』には、原初的な古いバージョンに加えて、新たな二つのヴァージョンが存在した<sup>(35)</sup>。古いバージョンから展開して、全編が韻文で綴られた、東トルキスタンの説一切有部教団に伝承されたヴァージョン (Rezension 1, Recension 1)、もう一つは、古いバージョンを引き継ぎ、チベット語訳に一致し、部分的に『瑜伽師地論』等に引用され、根本説一切有部教団が伝承したヴァージョン (Rezension 2, Recension 2) である。後者は専らガンダーラやカシュミールに伝承されたものであるらしい。中国領中央アジアの東トルキスタンを中心とする地域から多く出土する写本類に基づいたベルンハルト校訂本は、このうちの Recension 1 の諸写本を底本として校訂された梵文テキストである。これに対し、本稿で取り上げた一葉はチベット語訳に一致し、さらにシュミットハウゼン教授が紹介する『瑜伽師地論』における引用にも一致する。しかもそれらはパーリ語の『ウダーナ』と同様、散文でウダーナの句が現れる。また二つのヴァージョンに先立つ古バージョンの写本、そのような写本のひとつと見なされる『ウダーナヴァルガ』のスバシ写本も、第26章「涅槃の章」は完全には回収されていないが、この断簡に対応する部分では、散文でウダーナの句が現れる。以上のような事実から、この写本断簡が属する『ウダーナヴァルガ』は、ベルンハルトの校訂出版した Recension 1 の断簡ではなく、古い伝承を伝え、今ではわずかな梵文写本の断片だけが残り、チベット語訳あるいは他の文献における引用でしか知られていなかった Recension 2 の断簡であると結論づけられる。たった一葉の断簡ではあるが、『ウダーナヴァルガ』の成立過程、あるいは古いバージョンのテキス

ト伝承を考察する上で重要な資料である。

〔付記〕

矢田修真師より資料提供を受けてから時間的余裕がなく、本稿では断簡に含まれる各ウダーナについて、漢訳に残る関連資料の細部、あるいは『ウダーナヴァルガ』をめぐる内外の研究成果の詳細にまで目を通すことができなかつた。また短時間では内容的に解決できない点も一部残されているが、矢田師が所有するギルギット写本断簡類の重要性の一端は本稿で明らかにすることができたと思う。貴重な資料を提供いただいた矢田修真師には本稿を借りてあらためて御礼申し上げたい。提供していただいた他の断簡については、今後機会があれば紹介してゆきたいと考えている。

〔参考文献〕

榎本文雄

[1980] 「*Udānavarga* 諸本と雑阿含経、別訳雑阿含経、中阿含経の部派帰属」『印度学仏教学研究』28-2, pp. (55)-(57).

小玉大圓（編）

[1980] 「カシュミール仏教調査報告（1）」『佛教大学研究紀要』64号, pp. 26-72.

小玉大圓

[1982] 「カシュミール仏教研究の課題と展望（1）」『龍谷大学論集』420号, pp. 54-72.

真田康道

[1980] 「*Samghāṭasūtra-dharmaparyāya* について」『人文学論集』（佛教大学文学部学会）14号, pp. 57-73.

[1981] 「*Samghāṭasūtra-dharmaparyāya Śrinagar Manuscript* (1)」『人文学論集』（佛教大学文学部学会）15号, pp. 32-57.

[1982] 「*Samghāṭasūtra-dharmaparyāya Śrinagar Manuscript* (2)」『人文学論集』（佛教大学文学部学会）16号, pp. 1-11.

中谷英明（Nakatani, H.）

[1973] 「*Pali Udāna* と *Udānavarga* 編纂」『印度学仏教学研究』21-2, pp. (75)-(79).

[1987] *Udānavarga de Subāṣi*, Tome I, 108 pp, Tome II, 20 + 21 planches, Paris.

[1988] 『スバシ写本の研究』人文書院, vi + 325 pp.

中村元

[1978] 『ブツダの真理のことば感興のことば』岩波文庫

並川孝儀

[1982] 「ギルギット写本断簡 *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra* 研究報告」『人文学論集』（佛教大学文学部学会）16号, pp. 1-11.

矢田修真

[1987] 「サンスクリット仏典発見記」（上）『中外日報』昭和62年4月13日, 第1面, （下）『中外日報』昭和62年4月15日, 第1面.

Balk, Michael

[1984] *Arbeitsmaterialien A Prajñāvarman's Udānavargavivaraṇa: Transliteration of its Tibetan Version*, Vols. I and II, 1088 pp. Bonn.

Bernhard, Franz

[1965] *Udānavarga (Sanskrittexte aus den Turfanfunden X)*, Band I, Göttingen, 537 pp.

[1969] “Zum Titel des Sogenannten *Udānavarga*”, *ZDMG-Supplementa* 1, Wiesbaden, pp. 872-881.

Hartmann, Jens-Uwe

[1997] “Studies on the Gilgit Texts: the *Sarvadharmaguṇavyūharājasūtra*”, *Dharmadūta* -

*Mélanges offerts au Vénérable Thích Huyền-Vi*, Paris, pp. 135-140.

Hinüber, Oskar von

[1979] *Die Erforschung der Gilgit-Handschriften (Funde buddhistische Sanskrit-Handschriften, I)*, Göttingen, 34 pp.

[1982] *A New Fragmentary Gilgit Manuscript of the Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Tokyo, xvii + 101 pp.

Hinüber, Oskar and Norman, K. R.

[2003] *Dhammapāda*, Pali Text Society, Oxford.

Schmithausen, Lambert

[1970] “Zu den Rezensionen des Udānavargaḥ”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, Band 14, pp. 47-124.

[1991] “Yogācārabhūmi: Sopadhikā and Nirupadhikā Bhūmiḥ”, *Papers in Honour of Prof. Dr. Ji Xianlin on the Occasion of his 80th Birthday*, Vol. II, pp. 687-711.

Steinthal, Paul

[1885] *Udāna*, Pali Text Society, Oxford (Rep. 2002)

Windisch, Ernst

[1889] *Iti-vuttaka*, Pali Text Society, Oxford (Rep. 1975)

Zongtse, Champa Thupten with Dietz, Siglinde

[1990] *Udānavarga (Sanskrittexte aus den Turfanfunden X)*, Band III, Göttingen, 447 pp.

【注】

- (1) 入手の経緯については、矢田師自身による報告が当時の中外日報紙に二回にわたって掲載されている。矢田修眞 [1987] 参照。
- (2) Hinüber [1979] p. 25.
- (3) この貝葉写本については、その後、Chandrabhal Tripathi によって *Sarvadharmaguṇavyūharājasūtra* (『一切功德莊嚴經』大正1374) に同定された。同定の事情、および写本が発見され Sir Pratap Singh Museum に収蔵された経緯については Hartmann [1997] に詳しい。本写本に基づく梵文テキストは、ミュンヘン大学の Oliver von Criegen によって博士論文の中ですでに作成され、近々出版予定と聞く。
- (4) 調査報告については小玉大圓 (編) [1980] 参照。さらに小玉大圓 [1982] も参照。
- (5) 真田康道 [1980] [1981] [1982]
- (6) 並川孝儀 [1982] Hinüber [1982]
- (7) nissitassa ca calitaṃ, anissitassa calitaṃ n' atthi, calite asati passaddhi, passaddhiyā sati rati na hoti, ratiyā asati āgatigati na hoti, āgatigatiyā asati cutūpapāto na hoti, cutūpapāte asati n' ev' idha na huraṃ na ubhayamantare, es' ev' anto dukkhassā 'ti. (PTS ed., p. 81, ll. 6-10) 以下パーリ語テキストについてはすべて PTS 版を用いる。
- (8) Zongtse [1990] pp. 262-263, Nos. 19-22 に対応。チベット語訳の元になった原本はベルンハルト本とヴァージョンが異なることが推定されるため、ウダーナの番号はベルンハルト本の偽番号とは異なる。
- (9) Bernhard [1965] p. 327, niḥśritasyācalitaṃ prasrabdhīś ceha vidyate | na gati na cyutiś caiva duḥkhasyānto nirucyate || 26.20 ||
- (10) 中谷英明 [1987] Tome I, p. 75, [1988] p. 259.
- (11) 例えば、Zongtse [1990] p. 262, l. 1, 2 など。
- (12) Zongtse [1990] pp. 264-265, Nos. 23-25 に対応。
- (13) atthi bhikkhave ajātaṃ abhūtaṃ akataṃ asaṃkhatāṃ, no ce taṃ bhikkhave abhaviṣṣa ajātaṃ abhūtaṃ akataṃ asaṃkhatāṃ, na yidha jātaṣṣa bhūtaṣṣa katassa saṃkhatassa

- nissaraṇaṃ paññāyetha. yasmā ca kho bhikkhave atthi ajātaṃ abhūtaṃ akataṃ asaṅkhatāṃ, tasmā jātassa bhūtassa katassa saṅkhatassa nissaraṇaṃ paññāyati'ti. (p. 80, l. 23 -81, l. 3) これと同文は *Iṭivuttaka*, 43 (p. 37) にも現れる。
- (14) 中谷英明 [1987] Tome I, pp. 75-76, [1988] pp. 259-260.
- (15) Schmithausen [1970] p. 77.
- (16) Schmithausen [1991] 特に p. 706 参照。
- (17) Bernhard [1965] p. 328, ajāte sati jātasya vaden nihsaraṇaṃ sadā | asaṃskṛtaṃ ca asaṃpaśyaṃ saṃskṛtāt parimucyate || 26.21 ||
- (18) Zongtse [1990] pp. 262-263に2箇所 “sems pas byas pa” と訳されている語が patita に相当すると思われる。
- (19) Bernhard [1965] p. 328, jātaṃ bhūtaṃ samutpannaṃ kṛtaṃ saṃskṛtaṃ adhravam | jarāmarāṇasaṃghātaṃ moṣadharmapralopanam | āhāranetrīprabhavaṃ nālam tad abhinanditum || 26.22 || tasya nihsaraṇaṃ śāntam atarkāvacaraṃ padaṃ | nirodho duḥkhadharmāṇāṃ saṃskāropaśamaṃ sukham || 26.23 ||
- (20) Zongtse [1990] pp. 265-266, Nos. 26-27に対応。
- (21) jātaṃ bhūtaṃ samuppannaṃ kataṃ saṅkhatam addhavaṃ | jarāmarāṇasaṅkhatam rogaṇiṃ paḥṅguṇaṃ | āhāranettippabhavaṃ nālam tad abhinantitum || tassa nissaraṇaṃ santaṃ atakkāvacaraṃ dhavaṃ | ajātaṃ asamuppannaṃ asokaṃ virajaṃ padaṃ | nirodho dukkhadhammāṇāṃ saṅkhārūpasamo sukho ti || (pp. 37-38)
- (22) 中村元 [1978] 348頁、注22は、チベット語訳で rgyud と訳されていること、『ウダーナヴァルガ』の漢訳『法集要頌經』では「因縁」と訳されていること（大正4巻791a13）を指摘して、「原因」という理解を示唆する。確かに漢訳からはこの部分が hetu（原因）であったことが推測されるが、そもそも hetu のチベット語訳は rgyu ではあっても、rgyud ではない。ただ *Udānavarga-vivaraṇa* のチベット語訳では、この部分は rgyu と訳されている。Balk [1984] Vol. II, p. 720, l. 33.
- (23) atthi bhikkhave tad āyatanāṃ, yattha n' eva paṭhavī na āpo na tejo na vāyo na ākāsaṇācāyatanāṃ na viññāṇānañcāyatanāṃ na ākiñcaññāyatanāṃ na nevasaññānāsaññāyatanāṃ n' āyaṃ loko na paraloko ubho candimasūriyā, tad amhaṃ bhikkhave n' eva āgatiṃ vadāmi na gatiṃ na ṭhitiṃ na cutiṃ na upapattiṃ, appatiṭṭhaṃ appavattaṃ anārammaṇam eva taṃ, es' ev' anto dukkhassā 'ti. (p. 80, ll. 10-16)
- (24) Zongtse [1990] pp. 266-267, Nos. 28-30に対応。
- (25) Bernhard [1965] p. 329, abhijānāmy ahaṃ sthānaṃ yatra bhūtaṃ na vidyate | nākāśaṃ na ca vijñānaṃ na sūryaś candramā na ca || 26.24 || naivāgatir na ca gatiṃ nopapattiś cyutir na ca | apratiṭṭham anālambaṃ duḥkhāntaḥ sa nirucyate || 26.25 ||
- (26) Bernhard [1965] p. 330, yatra nāpo na pṛthivī tejo vāyur na gāhate | na tatra śuklā dyotanti tamasa tatra na vidyate || 26.26 || na tatra candramā bhāti nādityo vai prakāśyate | yathā tv ihātmanā veti munir mauneyam ātmanaḥ | atha rūpād arūpāc ca sarvaduḥkhāt pramucyate || 26.27 ||
- (27) Zongtse [1990] p. 268, Nos. 31-32に対応。
- (28) yattha āpo ca paṭhavī tejo vāyo na gādhati, na tattha sukkā jotanti ādicco na ppakāsati, na tattha candimā bhāti tamo tattha na vijjati. yadā ca attan' āvedī muni monena brāhmaṇo, atha rūpā arūpā ca sukkhadukkhā pamucattīti. (p. 9, ll. 4-8)
- (29) Bernhard [1965] p. 330, Var. lect., 27c, EC44.
- (30) Bernhard [1965] p. 330, niṣṭhāgato hy asaṃtrāsī na vikanthī na kaukṛtiḥ | ācchettā bhavaśalyānām antimo 'sya samucchrayaḥ || 26.28 ||
- (31) Zongtse [1990] p. 268, No. 33に対応。
- (32) Hinüber, Norman [2003] p. 99, niṭṭhaṅgato asantāsī vītataṅho anaṅgaṇo, acchidda

bhavasallāni antimo `yaṃ samussayo.

- (33) Bernhard [1969] この論文については、2010年4月より佛教大学に研究員として滞在し、現在はカリフォルニア大学バークレー校のステファン・バウムス (Stefan Baums) 博士に『ウダーナヴァルガ』のテキスト伝承を巡る諸問題とともに御教示を得た。御礼申し上げる。
- (34) 中谷英明 [1973]
- (35) Schmithausen [1970] さらに榎本文雄 [1980] も参照。

(まつだ かずのぶ 仏教学科)

2010年10月12日受理

**追記** 初稿を待つ間、本稿中の写本断簡のローマ字転写および梵文テキスト部分を切り取り、矢田師のコレクション22点のカラー写真の複写も添えて、筆者の関係するヨーロッパと米国の研究者たちの回覧に付しておいた。すると独ゲッチンゲン大学のクラウス・ヴィレー (Klaus Wille) 博士より12月15日付のメールで重要な情報が寄せられた。博士は今月 (12月) の初旬、ドイツの中垂探検隊が将来したトルファン (トルキスタン) 出土写本の調査のため、ベルリンの科学アカデミーで1週間を過ごしたが、同アカデミーに保存されている故チャンドラバール・トリパティー (Chandrabhal Tripathi) 博士によって1982年にスリナガルの Sir Pratap Singh Museum で撮影された多数の写本写真を、かつては不完全な形の複写では入手していたが、今回は完全な形で入手したという。本稿の注3でも触れたベルリンのトリパティー博士は、トルファン写本に含まれる『雑阿含』の「因縁相应篇 (Nidāna-saṃyukta)」や、ギルギット写本に含まれる『増一阿含』の梵文断簡テキストを校訂出版 (前者は1962年、後者は1995年) した研究者として我が国では知られている。ヴィレー博士の情報によると、今回入手したそれらの写真を眺めているうちに、本稿で紹介した『ウダーナヴァルガ』の断簡一葉の裏面 (verso) だけでなく、矢田師のコレクションに含まれる表面 (recto) の写真もその中に存在することを発見したというのである。さらにそれから数日後に届いたメールでは、矢田師のコレクション22点のうち、他の13点もベルリンに保存されている写真の中に撮影されていることが判明したという。ヴィレー博士によると、トリパティー博士は1982年の後、1987年にも再び Sir Pratap Singh Museum を訪れて調査を行っているが、2回の調査の後、いずれも短い調査報告書 (未公表) が作成されている。ヴィレー博士からは、これらの報告書2点 (1982年は英文で、1987年は独文で) も複写をメールに添付して送られてきたが、1987年の報告書では、1982年の調査の時には存在していた断簡約30点が1987年の時点では見当たらなくなっていることが述べられている。これらの情報から推定されることは、矢田師のコレクション22点の過半は、1982年のトリパティー博士の訪問以降にミュージアムから何らかの事情で流出して市中に出回り、最終的にラダックのレーあるいはスリナガルで1986年に矢田師によって購入されたミュージアムの旧藏品であったということである。

さらに本稿の内容に関わることであるが、トリパティー博士の撮影した写真は文献撮影に適

した硬度の高いモノクロームフィルムが使用されているようで、筆者が矢田師から提供されたカラー写真では不鮮明な部分の読みを一部修正することができる。裏面1行目の最初の文字は矢田師の写真ではつぶれて全く読めないが、モノクローム写真では、そこに子音のpおよびその前後の子音の一部が見える。従って、本稿中の筆者のローマ字転写は、その部分を表面7行目の最後の部分と併せて、以下のように修正する必要がある。

r7 ...asamu-)

v1[t]p(an)[n](aṃ tasmāj jātasya bhūtasya) ...

この修正は、ヴィレー博士の指摘と、この部分を含むモノクローム写真の複写を博士に送っていただいて明らかになったことである。ただし、これは破損等によって失われた文字列をどのように復元するかの問題であり、破損により、あるいは矢田師撮影の写真からは読めない部分を想定して補った本稿中の校訂テキストについては、この箇所の文章自体を訂正する必要はない。なおヴィレー博士によると、ベルリンに保存されている写真に付されたメモ等からは、トリパティー博士によってこの一葉がすでに『ウダーナヴァルガ』に同定されていた形跡は見られないという。貴重な情報を寄せていただくとともに、一般には未公表の資料を提供していただいたヴィレー博士に御礼申し上げたい。

(2010年12月24日)

